

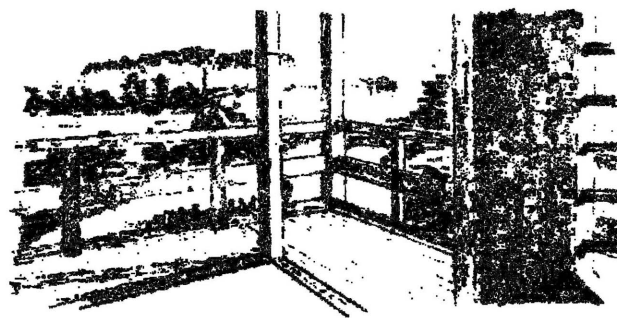
はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

鵜沼

昭和五十九年三月号
通巻第十九号

鵜沼を語る会



旧東家二階より江の島を望む

島谷義敏作成「芥川龍之介アルバム」より書畫模写

龍之介一家の住んだ

二階建ての家について

富士 山

（故福田医師の息女の話）

「龍之介さんの借りた二階建ての家（今は松永さんが改築して住んでいるが）とは、銀座か新橋あたりにお店を持っておられた柴さん（芝？ス波？）の所有であった。

柴さんから今の松永さんに所有がかわったのはいつの頃か記憶がない。当時、私はまだ十四才位であったから（今は七十才位）。

その二階家へ、イの四号から龍之介さんが移り住んだのは九月二十日頃か。

その家へ大正十五年九月二十五日、斉藤茂吉さんと土屋文明さんがハランの鉢を持って見舞に來られた訳です。

芥川さんの死後昭和三年ごろ菊地寛さんの紹介で、田中純さんが住んだことがある」

以上は昭和五十八年一月故福田医師の娘さ

ん（今は七十才位）と耳鼻科待合室で

話し合った時の話の内容である。

つまり、龍之介は東屋↓イの四号↓柴

さんの二階家↓田端と移り住んだ訳で、こ

れは龍之介の姪の葛巻左登子さんも証言しておられる。これと違った移り方というものもあるが、それはすべて誤りである。

いまはその二階建と思われるものは二階を取り去り、一階の一部を新築の家にくつつ

けてあるが、何分にも六十余年もたったもので、すっかり旧くなっているが、松永さんは龍之介に由緒のあるものとして保存しておられるのだろう。

そのかたわらの松の木の根元に、如何にも年老いて弱ったと思われるハランの株がある。これが茂吉らの持参した例のハランの老いた姿ではないかと思われる。

（昭和五八・五・二三追記）

「野呂栄太郎さん」を語る（二）

逸見千鶴子

2 林達夫さんのこと

林達夫さんは、鵜沼在住六十年前後になる草分けの一人でここ数年来病臥されています。「鵜沼時代の野呂さん」で愛子さんが語っているように、「思想」の編集に居られたので何かと大変世話をされた方です。

林夫人芳子さんのおさとは、昔柳小路にあった広大な高瀬邸で、その名残は高瀬通りとなっています。余り知る人はありませんが、

同家の長女は和辻哲郎夫人照子さん、次女のお名前は知りませんが、美術評論家矢代幸雄氏の先妻でした。三女が林夫人というわけで鵜沼の三姉妹です。

当時としては珍しい教育ママであった私の母は、島田さんに紹介させて高瀬弥一さんに私を弟子入りさせました。泳ぎたい盛りの私を一夏英語の勉強にやりましたが、大正八年のことでした。

林さんは、八、九年頃結婚されたと思いますが、今の天金通り、島田さんと私宅の少し海岸よりに四軒別荘とかがあって、その一軒に新居をかまえられました。今の富士先生のお宅あたりです。思えば旧いおつき合いです。

先日、岩波から手紙がきました。今度岩波

で昭和四年から十一年になくての「思想」九十三冊を復刻するので諒解を得たいとのことでおどろきました。逸見七回忌十月十六日の翌十七日のことでしたので感なきを得ませんでした。

昭和初年、野呂さんも逸見も「思想」にかかせて頂き林さんにはとりわけお世話になりました。そこで庭の薔薇をもつて御見舞に出しました。夫人のはなしによるとねてばかり居られるとか、八十七才になられるそうです。

加藤周一によると大知識人とのこと。野呂さんのことも、もう書いて頂けさうもなく誠に残念の至りに思います。戦時中は、無言の抵抗をつらぬいたと云われます。以前に、鵜沼には林達夫、今井達夫りよたつおの両達夫が居るのでや

り難いといわれたことを思い出します。

岩波の小林勇さんは、一時事情があつて独立して鉄塔書院という出版社をしていました。命名は幸田露伴で、看板もかいておやりになったとか。野呂さんの弟の繁雄と愛子さんの弟正夫とはこの店につとめていました。

小林さんは「日本資本主義発達史」を何とか自分のところで出したいと林さんに紹介方をたのみました。林さんはしばらく考えた末、野呂さんの恩師小泉信三氏のところへ行くよう指示されました。小林さんは時をおかず高輪の小泉邸にかけつけて依頼したところ、巻紙に野呂さんあての手紙をかい下さつたとのこと。そして小林さんはその日の中に鵜沼へとって返し、遂に野呂さんを口説き

おとしました。この名著が上梓されたのは昭和五年二月のことでした。おたのまれして、検印は私がありました。

林さんが、野呂さんや逸見に理解があり親切であったかは、何も御本人はいわなかったので知るよしありませんでした。ところが、のちに旧友会の名簿で判りました。御名前は判りませんが妹さんと同志社大学を出た方があり、名古屋で党活動をして病気になって、鵜沼でなくなっておられたのです。三十年の追悼会の時プリントをもって訪ねた時、夫人はこの妹さんを野呂さんに貰ってほしいと話しかけていたと、はなされました。

林さんは私の義兄で社会学者の田辺寿利にも親切にして下さり、東洋大学の葬式にい

らして下さり私共に弔意をのべられました。お丈夫な時にもつと屢々お話をきいておけばよかったと残念に思っております。

3. 羽仁五郎さんのこと

野呂さんのシンパの中、最も行動における勇気を発揮したのは羽仁五郎さんにおいて他にはないでしょう。野呂さんに心服・傾倒して身の危険を忘れて最後まで尽くされました。なくなられたことを知って、私は野呂さんに代わったつもりで弔問にかけつけざるを得ませんでした。

七九年一月、羽仁説子著「妻のこころ」が岩波新書で出ました。それを一昨年私は著者

からおくられました。同書三「暗い時代へ」

に『日本社会主義発達史講座』のこと「野呂栄太郎さんのこと」、羽仁さんの逮捕、釈放のことなどかかれています。で夫妻が誠心誠意野呂さんに尽くされたことがよく判ります。

小林勇さんの随筆「人はさみしき」中の野呂さんのくだりに載っているエピソードは感銘的です。小林さんと羽仁さんが、羽仁さんの兄君で医者の方崎芳郎氏を伴って野呂さんを診てあげにゆきました。別室の病人もとのまれた人が野呂さんの父君で、その時偶然にも臨終に立ち会うことになったのでした。昭和六年七月二十一日のことでした。篠

崎さんはあり金全部を香奠にさし出したため、帰りの交通費がなかったとのこと。この人は、その後も野呂さんの診察に行つてあげ

たよしです。

野呂さんの不朽の名著「日本資本主義発達史」が、口火を切ったかたちで、学者たちの間に研究熱が起ったことと、段々険しくなる情勢の要請するところもあつて、「日本資本

主義発達史講座」出版の話がもち上りました。発端は、当時党のアジ・プロ部長をしていた岩田義道氏と野呂さんとはなし合いであると逸見の日記にはしるされています。鉄塔にもちこんだところ、小出版社故、荷が重過ぎるとして岩波を提案しました。羽仁さんは岩波には特別信用があつたので岩波主人を説得してこの大事業を発足させたとのこと。

当時新進気鋭の平野義太郎、山田盛太郎、大塚金之助等の編集陣と執筆陣でしたのでこの

種のものとしては画期的なものでした。岩波ですから容易に弾圧されなかったのですが、それでも検事局がうるさくなり、第四回配本あたりから伏字を余儀なくされました。

俊敏な頭脳の野呂さんだからこそ、むづかしいの多い学者たちを統制することが出来たのでした。昭和七年から八年にかけて発刊されたのですが、肝心の野呂さんは、趣意書をかいただけで、予定の論文三篇は遂々執筆されませんでした。地下活動をしていたので、かくどころでははかったのです。逸見は鉱山業をかくことになっていましたが出来ませんでした。

羽仁さんは、昨年六月の（「図書」に『日本資本主義発達史講座』——五十周年によせて）

を執筆され、詳細に述べておられるので、この講座の価値がいかに水準が高く立派なものであるかがよく判ります。

野坂さんは一九四七年版の野呂栄太郎全集の序文に次のようにかかれています。

「野呂栄太郎は、日本の革命運動の生んだ最もすぐれた、そして公式的でない独創的なマルクス・レーニン主義理論家である。かれは日本の資本主義の本質とその発展とを、マルクス・レーニン主義の立場から、科学的に分析し、その弱点と危機と崩壊の過程とを暴露した最初の日本人である。その後、これらの問題について、他の人々によって理論的發展がとげられた。しかし、それはつねに彼の労作を基礎とし、そこから出発されている。彼

の書物は不朽である」

昭和七年六月にかいた野呂さんの趣意書を次にかかげます。

「……急迫せる情勢に転倒せる帝国主義者の脳裏には、恐らく戦争とファシズム以外の考えは浮かび得ないであろう……本講座は、今は世に問いうる限りにおいて、日本資本主義のもつとも包括的な科学的研究であり、その本質的矛盾のもつとも根本的な分析である」

今、この野呂さんの言葉に痛感することは、最近日本が益々右傾化を強め再び戦争の危険が私どもの身边にしのびよっていることです。

小林勇さんは、野呂さんがあの病身・不具でいかにアジトに困って寒空を転々されていたかを同情をこめてかかれています。

逸見は、野呂さんに対する友情から、老母と乳児が居るのに入党行動を共にしました。家内子供をつれてもぐったなんて例は余りなかったと思います。昭和八年一月、阿佐谷馬橋三丁目の小林多喜二の母親のすぐ近くとも知らないで本名で住んでいました。

そこへ、野呂さんはロシヤ帰りの山本正美さんを連れてころがりこんで来られたのです。よくよく困られたからでしょう。当時早稲田の学生で共青の運動をしていた中野新さんが、みんなの秘書として出入するようになりました。このことは「逸見重雄追悼集」にかかれています。三月中野呂さんが盲腸炎になって困っている時羽仁さんが迎えに来られました。つかまったら逆さにつるされるような

怖ろしい時代でした。戦後、羽仁さんは「人民の天才」野呂栄太郎を阿佐谷の逸見重雄の家につれに行った」と何かにかかれたと逸見からききました。羽仁さん自身も八年と二十年に二度留置場にほうりこまれて拷問の浮目にあわれました。

説子夫人のかくところによると、羽仁さんは、非合法活動中の生活費をずっとみついで居られたとのこと。野呂さんの最後のアジトは、逸見が探してあげたと見えますが、その時の布団類や食器などは羽仁さんのところから出たときいています。何にしても、シンプの雄であって、仲々ここまで出来るものではありません。

4 小林勇さん

野呂さんとは、非常に密接に関係のあった人でしたが、私どもはおめにかかったことはありません。大内兵衛先生は、「大変伶俐な男だよ」といわれたことがありました。大学出ではなかったようですが岩波関係の多数のすぐれた文化人の知遇を受け、自然とおのれをみがき偉くなった人のようです。岩波の主人がゆるさなかった結婚を露伴がとりもつたと文子女史からききました。のちに会長になって岩波を大きくしたのでから、出色の婿というべきでしょう。

この人が心を引かれ尊敬した人たちの評伝を集めて「彼岸花」という随筆を出しまし

た。その後、一九七二年「文芸春秋」九月と特別号に『人間を書きたい』の連載第九回が「野呂栄太郎」をかいています。本年（昭58）正月私は、この記事が逸見の日記に写してあるのを見つけて原稿用紙に清書しました。かきながら屢々涙がとまりませんでした。小林さんもおそらく泣きながら残した文章だと思います。

小林さんあての手紙十四通が発見されて全集に載っていますが、悉くが借金依頼の惨憺たるものです。

昭和八年十一月二十八日逮捕されて、翌九年二月十九日絶命、三十三という短い生涯でしたが、輝かしい足跡をのこしました。

論敵に対する舌鋒は鋭かったのですが、孝

心深く、周囲の人々には大変心の優しい人でした。さればこそ、有名無名の多くの人々、殊に右にのべた一流の人たちが心から支援したのです。小林さんが恩師小泉信三氏のことをかいたくもりも感動的です。小林さんも敗戦近く数ヶ月留置されました。思想弾圧というわけです。

それで治維法をとり扱った佐々木敏二氏の文ものせておきます。

追悼歌七首

野呂栄太郎の名も今浮かぶやさき心もて
りし君を信ぜむ
歌集含紅集吉野秀雄

（小泉信三のこと）

含紅集に詠まれし君も血を吐きて短き一
生鮮烈なりき

弾圧に抗し結核・不具・窮乏ものともせ
ず君が残せし足跡不滅

冬の時代身の危険思はで夫の友病むを移
せし君を忘れじ
羽仁五郎氏

その鬼才うたわれし君今は亡し二人なき
友われらを結べる

血と涙もて淡々語る亡夫の「道標」稀有
の師と友を得て青春悔なし

河上肇先生と野呂栄太郎氏

無二の友四十九年の忌に解放運動無名戦
士墓に亡夫も合葬の沙汰

京都学連事件

「京都学連事件」とは、共産主義者弾圧法で
ある治安維持法が制定された翌一九二六（大
正十五年）一月十五日、京都大学、同志社大
学などの社会科学研究会員三八名が治安維持
法第二条違反で起訴され、京都地裁、大阪高
裁で有罪とされた事件である。

しかもその被告たちの所属していたのは、
共産党でも無産党でもなく学生の研究団体で
ある社会科学研究会（以下社研と略す）であ
るという治安維持法そのものからみても不可
思議な適用のなされた事件であった。

治安維持法は先ずはじめにこの学連事件に
次いで、三・一五事件、四・一六事件に代表
される共産党弾圧に、さらに社会主義者、自
由主義者、キリスト者にまでその適用の範囲
を拡大していった悪法である。

治安維持法適用の歴史は、つねに条文の恣
意的拡大解釈の連続の歴史であるが、その傾
向は京都学連事件にすでに明白にあらわれて
いる。

『歴史文学』
Vol.2 特集現代史の断面・その1』

同志社大講師佐々木敏二

—— 完 ——

（昭和58・11・4原稿受付）

「鵠 沼」 昭和 5 9 年 3 月 号
通卷第 1 9 号

昭和 5 9 年 3 月 1 3 日
編集・発行 鵠沼を語る会

藤沢市鵠沼海岸 2 - 1 0 - 3 4
鵠沼公民館内
電話 3 3 - 2 0 0 1、2 0 0 2